

主 題：主に喜ばれる結婚観2

聖書箇所：コリント人への手紙第一 7章36－40節

確かに、結婚は人生における大きな選択の一つです。しかし「いかに大きな選択であろうと私たちの神に対する責任を忘れてはならない」とパウロは教えるのです。前回、私たちはIコリント7：25から、クリスチャンが大きな選択（判断）を下すとき、どのように物事を考え、何を優先すべきなのかということについて、みことばから学んできました。

☆大きな選択（判断）をくだす時の考え方について

I. 容易に環境を変えようとしないこと 25－28節

今の環境は神が与えてくださったものだから、そして、私たちには先のことが分からないのだから、物事を性急に判断してしまうのではなく、状況をしっかり見極めて考え行動するようにとパウロは教えています。

II. 主に仕えることを最優先する 29－35節

それこそが私たちの生かされている目的だからです。私たちがしっかりした秩序ある生活を送ることによって主に仕えて行くこと、それが私たちの益になることだとパウロは言います。自分の務めをしっかりと理解してそれを心から喜んで実践すること、そのとき、私たちには心配や思い煩いがなくなるのです。パウロは結婚について教えていますが、結婚のことに限定されず、真に神に喜ばれることが何かを私たちはいつも考えて、それを優先して選択して行くこと、間違った選択は私たちから益を奪い心配や思い煩いをもたらすということ学びました。

続いて、7：36から学んで行きましょう。

III. それぞれに、神のご計画がある 36－38節

大きな判断を下すとき、私たちがしっかりと覚えておくべきことの第3番目は、「それぞれに、神のご計画（＝みこころ）がある」ということです。私たちがいろいろな選択を迫られた時、そこにある答え（＝私たちのなすべきこと）は、必ずしも一つだけとは限らないのです。時には、幾つもの選択、幾つかの答えがある場合があります。

●私たちは一人ひとり、違う存在として造られ導かれている

そのことに注意して36－38節をご覧ください。ここで、パウロは「すべての者は結婚すべきではない！」というような、はっきりとした決断を下してはいません。36－38節「**36 もし、処女である自分の娘の婚期も過ぎようとしていて、そのままでは、娘に対しての扱い方が正しくないと思い、またやむをえないことがあるならば、その人は、その心のままにきなさい。罪を犯すわけではありません。彼らに結婚させなさい。37 しかし、もし心のうちに堅く決意しており、ほかに強いられる事情もなく、また自分の思うとおりに行なうことのできる人が、処女である自分の娘をそのままにしておくのなら、そのことはりっぱです。38 ですから、処女である自分の娘を結婚させる人は良いことをしているものであり、また結婚させない人は、もっと良いことをしているのです。」**と、パウロは7章前半と同様、ここでも「～すべきでない」とか、「～でありなさい」というように決めつけてはいません。前々回、7章前半のみことばから学んだように、私たちが様々なことを判断する時、確かな聖書的根拠のないまま、それを「罪である」と決めつけてしまうことが意外に多いのではないのでしょうか。これはこの当時、「結婚しないことは大きな罪である」と考えていたユダヤ人たちに対して、コリント教会の一部の人たちは、誤った禁欲主義から「いや、結婚するよりも、そういった俗的な欲求をなくし、神にだけ仕える方がもっとすばらしい」というようなことを考えたのです。

彼らの問題はどこにあったのでしょうか？それは、神の本当のみこころというものを真剣に考えることなく、通り一遍に「必ず結婚しなければならない」とか、「結婚しない方がすばらしい」などと考え、そのような知識をひけらかそうとしたり、それを他人に強制しようとしたことに問題があったのです。彼らが気付かなければいけなかったことは、「神は、個人個人に対してご自身のご計画を持っておられる」ということだったのです。

「独身の娘が結婚しないている、それについて、親である自分はどうすべきなのか？」そのような真摯な質問に対して、パウロは無責任に（＝軽々しく）、結婚させるべきであるとか、いや、結婚させるべきではない、という答えを下しませんでした。というのは、一人ひとりに、神のみこころがあるからです。その人にとって何がベストであり、今後、その人がどのように導かれて行くのかということ、私たちは知り得る術がないからです。だから、パウロは7：7でこう訴えていました。Iコリント7：7「**私の願うところは、すべての人が私のものであることです。しかし、ひとりひとり神から与えられたそれぞれ**

の賜物を持っているので、人それぞれに行き方があります。」と、人それぞれに神は違った賜物を与えてくださいました。この世の中に全く同じ人間など一人もいません。顔や体型、才能や興味、得意なこと、苦手なこと、物の考え方や感受性も違います。感謝なことに、神は一人ひとりに対してすばらしいみこころ(＝ご計画)を持っていてくださるのです。問題は、あなたがそれを感謝するかどうかです。「周りの人たちは結婚している」とか、「周りの皆はこう考えている」と、私たちはそのようなこの世のしがらみや価値観からも解放され、自由にされたのです。前回に学んだ35節に「**ですが、私がこう言っているのは、あなたが自身の益のためであって、あなたがたを束縛しようとしているではありません。むしろあなたがたが秩序ある生活を送って、ひたすら主に奉仕できるためなのです。**」とあったように、私たちクリスチャンこそ、この世の間違った教えや様々な誘惑に惑わされることなく、自由に、かつ、幅広い観点で物事を考え、どうすることがより価値のある人生を送ることができるのか、より主を喜ばせることができるのか、ということをも正しく判断できるようになった者なのです。

この手紙の7章の部分は、コリント教会の人たちが「果たして、クリスチャンは結婚すべきかどうか」という質問に対するパウロの答えでした。しかし、この与えられた選択肢に対して、パウロはどちらか一方の答えを出してはいませんでした。同じように、私たちが様々なことを判断する時、正しい選択は必ずしも一つであると考えする必要はないのです。確かに、はっきり聖書が禁じている場合や、「こうしなさい」と教えられている場合は別です。しかし、そのような明確な教えがない場合は、(1)容易に環境を変えようとするのではなく、しっかりと物事を考え、(2)自分に与えられた責任(＝神様に仕える)を全うするためには、どうすれば良いのか?それを考えることです。その人には、その人に対する神のご計画があるからです。

●私たちに、選択の自由がある

時には、いろいろな答えがあって良いし、それぞれ状況が違う者たちが必ずしも同じ判断をする必要はないのです。しかし、譲ってはならないことは、私たちが何のために生かされ、何のために救われているのか、それをしっかりと覚えておくことです。実際の生活においては、一方の選択が必ず正しくて、もう一方が必ず間違っているという訳ではない、そのような状況の方が多いのではないのでしょうか?私たちに、そういった選択の自由も与えられているのです。しかし、時々「これが神のみこころなのです!」と言って、そのことを強行しようとする場合があるのが残念です。というのは、もし、その選択が本当に神のみこころなら、間違いなく、神はそのみこころをその人だけでなく、主に対して忠実に歩んでいる者たちや、より霊的な者たちに示されるはずなのです。実際、パウロも、Iコリント2:11で「**いったい、人の心のかは、その人のうちにある霊のほかに、だれが知っているでしょう。同じように、神のみこころのかは、神の御霊のほかにだれも知りません。**」と教えるように、御霊が私たちに神のみこころを教えてくださいからです。もし、あなたが神のみこころを知りたいのなら、御霊に満たされて(＝神に喜ばれるように)歩むことです。それ以外に方法はないのです。また、同じように、御霊に満たされている兄弟姉妹にも、神のみこころというものは示されるはずなのです。

箴言にこのような言葉があります。「**愚か者は自分の道を正しいと思う。しかし知恵のある者は忠告を聞き入れる。**」(箴言12:15)、「**忠告を聞き、訓戒を受け入れよ。そうすれば、あなたはあとで知恵を得よう。**」(箴言19:20)。確かに、あなたには自由があります。しかし、本当に主にあって忠実な者(つまり、救われている者)は、より神の前に忠実に生きようとするが故に、多くの霊的な人たちのアドバイスを積極的に聞き、自分の歩みをより確かなものにしようとするのです。そのようにして、あなたが神の前により忠実に、また謙虚に生きて行く時に、神があなたを祝福され、益々、あなたは用いられて行くのです。

IV. 結婚は神からの賜物である 39-40節

ここでパウロは、結婚に関しての明確な規定について教えている訳ではないと何度もお話ししてきましたが、この39、40節では、はっきりとした結婚に関する規定があります。それは、結婚とは、神が定められた賜物(＝制度)である故に、私たち人間が軽はずみに、行動を起こしてはならないということです。39-40節「**39 妻は夫が活着ている間は夫に縛られています。しかし、もし夫が死んだなら、自分の願う人と結婚する自由があります。ただ主にあってのみ、そうなのです。40 私の意見では、もしそのままにしていられたら、そのほうがもっと幸いです。私も、神の御霊をいただいていると思います。**」

●それらを引き離してはならない

39節から、パウロは未亡人について話します。今もそうでしょうが、この当時も夫を亡くした妻は、弱い立場にあったと考えられます。このIコリント7章は、全体として結婚に関して教えられていますが、10-13節にも「**10 次に、すでに結婚した人々に命じます。命じるのは、私ではなく主です。妻は夫と別れてはいけません。11 —もし別れたのだったら、結婚せずにいるか、それとも夫と和解するか、どちらかにしなさい。—また夫は妻を離別してはいけません。12 次に、そのほかの人々に言いますが、これを言うのは主**

ではなく、私です。信者の男子に信者でない妻があり、その妻がいっしょにいることを承知している場合は、**離婚してはいけません。** 13 また、信者でない夫を持つ女は、夫がいっしょにいることを承知しているばあいは、**離婚してはいけません。**」とあるように、パウロは一貫して離婚を禁じています。それが神の教えですから、みことばは明確に離婚を禁じています。もし、あなたが神を信じ、神に従って行こうとするなら、軽々しく離婚を選択すべきではありません。聖書が離婚を認めている場合は、その相手が不貞を働いた場合（マタイ 5：32、それでも、相手を赦し、和解すべきだと思いますが）か、未信者の方が離婚を望む場合（I コリント 7：15）のみです。

マルコ 10：2-9に「**2**すると、パリサイ人たちがみもとにやって来て、夫が妻を離別することは許されるかどうかと質問した。イエスをためそうとしたのである。3 イエスは答えて言われた。『モーセはあなたがたに、何と命じていますか。』4 彼らは言った。『モーセは、離婚状を書いて妻を離別することを許しました。』5 イエスは言われた。『モーセは、あなたがたの心がたくななので、この命令をあなたがたに書いたのです。6 しかし、創造の初めから、神は、人を男と女に造られたのです。7 それゆえ、人はその父と母を離れて、**8 ふたりの者が一心同体になるのです。それで、もはやふたりではなく、ひとりなのです。9 こういうわけで、人は、神が結び合わせたものを引き離してはなりません。』**」とあるように、結婚によって、夫婦は「一心同体になる」のです。私は結婚した時、信仰を持っていなかったとか、私は神前結婚したとかは関係ないのです。結婚という制度そのものが神によって立てられ、導かれたものであるが故に、また、その二人は神によって引き合わされた者たちであるが故に、私たち人間はそれを引き離してはならないのです。離婚した場合でも、お互い、相手が活着している間はまた神の前に結婚関係は続いているのです。だから、相手が存命中は再婚が認められないのです。ですから、結婚式の時、私たちはこのような誓いをします。「相手が健やかな時も、病める時も、富める時も、貧しい時も、死が二人を分かつまで…」と。その人がすべきことは、その伴侶を与えてくださったのが神であり、その環境へあなたを導かれたのが神であることを受け入れ、その中で、どうすることが主に喜ばれ、受け入れられるのかを考えるべきなのです。

● 神に喜ばれる相手を選ばなければならない

結婚というのは確かに大きな選択です。一度結婚してしまったら、基本的に私たちは一生、その相手とやっていかななくてはなりません。だからパウロは、ここで結婚という例を挙げながら、大きな選択をする場合の指針を教えてくれているのです。クリスチャンである皆さん、もしあなたが結婚することを願いそれを選択されるなら、相手はクリスチャンでなければなりません。というのは、39節の後半を見ると「**ただ主にあってのみ、そうなのです。**」とあります。ここで「**主にあって**」と訳されていることばは、文脈から考えると「主にある者だけ」とも訳せることばです。口語訳では「それは主にある者に限る」と訳され、新共同訳でも「相手は主に結ばれている者に限ります」と訳されています。つまり、クリスチャンとの結婚を教えているのです。確かに、ここの文脈は再婚する女性について教えられているのですが、結婚というものが、女性だけでなく、男性にとっても、一生のものであるということを考えた時、これは女性だけに対する教えでないことは明らかです。同様に、ここの話しの流れを見て35節に「**…私がこう言っているのは、あなたがた自身の益のためであって、あなたがたを束縛しようとしているではありません。むしろあなたがたが秩序ある生活を送って、ひたすら主に奉仕できるためなのです。**」とパウロが教えているように、もし人が、主に奉仕すること、言い換えれば、主に仕えることを第一に考えるなら、どうして、未信者と結婚するという選択が出てくるのでしょうか？あなたが主に仕えるということを第一に考え、どうすれば主にあって秩序ある、正しい生活を送ることができるのかということを考えるなら、そこからのおのずと出てくる結論は、相手がただ単にクリスチャンであるだけでなく、どの人と結婚することが、より自分を霊的に高め、より自分が成長できるかということを考えるはずだということです。

40節「**私の意見では、もしそのままにしていられたら、そのほうがもっと幸いです。…**」というのは、「たとえ世間が何と言おうと、周りが何と勧めようと、しっかり自分を持ちなさい！」ということです。「結婚したら幸せになれる」、「結婚さえできれば、問題はなくなる」などと考えてしまうことへの警告だと思います。40節の後半「**私も、神の御霊をいただいていると思います。**」という表現は、恐らく、当時、コリント教会にいた「自分は主の御霊をいただいている」（I コリント 14：37）と誇っていた人たちのことを意識した、パウロの配慮であると考えられます。

いかがでしょうか？パウロは結婚という、人生の中で大きな選択を下す時の考え方を教える中で、結婚以外にも適用できる考え方、指針を示してくれました。（1）まずは、安易に環境を変えることで、問題をすり替えるのではなく、しっかりと慎重に物事を判断することを勧めます。（2）また、私たちが最優先にすべき課題を明確にしました。それは、「主に仕える」ということです。私たちは、すべての物事の判断を、このことを基準に考える必要があります。もし、あなたが、あることを選択しようとして、それが神に仕えることを困難にするなら、あなたはそれを止めるべきかもしれません。どのように

考え、行動することが、主に喜ばれるかをしっかりと考える必要があります。次に（3）すべてのことには神のみこころ、ご計画があることを覚えることです。通り一遍に物事を考えるのではなく、一つ一つの問題に対して、神が喜んでくださることを考え、アドバイスをいただきながら、より良い選択をして行くことがあなたにはできるのです。そして、（4）特に、結婚に関しては、大きな選択です。だからこそ、慎重に考え、神に祝福される結婚をしなければならないのです。

神は、このようのみことばを通して、あなたが神の前により良い選択をして行くことができるように導いてくださっているのです。それは、あなたが造られ、あなたが生かされている目的でもある、「神に仕え、神に従っていくことによって、神のすばらしさを現わして行くこと」です。あなたがそのように生きて行くなら、それはあなた自身の益になり、あなたは祝福を受けるのです。今日の箇所から、私たちは結婚というものが非常に強い関係ではあるが、この地上だけでのものであるということを見してきました。しかし、私たちイエスを信じた者とこの神との関係は永遠のものなのです。

この神に、益々、従って行こうではありませんか！